The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	未来の他者への返礼 : 被災地リレーによる未来との共生
Author(s)	渥美, 公秀
Citation	未来共生学. 2015, 2, p. 111-124
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51810
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Van Tienen, M., P. Scheepers, J. Reitsma, and H. Schilderman
2011 The Role of Religiosity for Formal and Informal Volunteering in the Netherlands. *Voluntas: International Journal of Voluntary and Nonprofit Organizations* 22(3): 365–89.

Wisely, N.
2007 Prosocial Behavior. In G. Ritzer (ed.) *Blackwell Encyclopedia of Sociology*. Blackwell Publishing (Blackwell Reference Online) http://www.sociologyencyclopedia.com/subscriber/tocnode.html?id=g9781405124331_yr2013_chunk_g978140512433122_ss1-118 (2014/10/01アクセス)

Wuthnow, R.
1995 *Learning to Care*. New York: Oxford University Press.

論文

未来の他者への返礼
被災地のリレーによる未来との共生

渥美 公秀
大阪大学大学院人間科学研究科教授

要旨

本稿では、利他的な行動を受けた際に、当の相手に対する返礼が事実上不可能である場合に、人々が行う未来の他者への返礼について、被災地のリレーをキーワードとしながら事例をもとに考察した。被災地のリレーを介した未来との共生について、サルトゥ＝ラジュの〈借り〉の概念に言及し、そこで構想される社会について考察を加え、〈借り〉の返済が返済者に及ぼす影響を検討した。その結果、被災地のリレーを介した未来の他者との共生について、２つのことが明らかになった。まず第１に、被災地のリレーは、未来の他者、すなわち、新しい災害における被災者への救援活動を促進する。第２に、リレーを実施している側の復興過程が促進される。ただし、リレーを実施している側の復興については、まだ仮説に留まる。被災地のリレーと、リレーの発信側の復興過程との関連に関する研究が待たれる。

目次

はじめに
1. 事例――被災地のリレー
2. 被災地のリレーに関する論点
3. 未来の他者への返礼
4. 被災地のリレーによる未来の他者との共生
おわりに

キーワード

被災地のリレー
災害ボランティア
〈借り〉

はじめに

人は、利他的な行動を受けると、利他行動を行った当の相手に対して、返礼する。これは、集団間のやりとりにおいても同様である。こうした返礼があまりにも一般的であることは、返礼を伴わない一方的な贈与がそもそも不可能であると言われることと呼応する。しかし、返礼しようにも、返礼する相手が特定できないこともある。例えば、匿名で送られてきた手紙が心に響く言葉を告げてくれても、お礼状の返信先がわからない。あるいは、災害時に義援金を受け取っても、それが多くの人々の浄財であることから、特定の人々に返礼するわけにはいかない。そんな時、人々は返礼を一旦保留し、未来に出会う他の人々に返礼することがある。もちろん、「返」という文字は、起点に戻すことであるから、未来に出会う他者に対して、「返礼」という語を用いるのは不正確ではある。しかし、ここでは、さしあたって、未来の他者に「まるで」「あたかも」お返しをするような事態を想定しておきたい。

本稿では、利他的な行動を受けた際に、当の相手に対する返礼が事実上不可能である場合に、人々が行う未来の他者への返礼について、事例をもとにしながら考察する。具体的には、過去の被災地で災害ボランティアの救援活動を体験した人々が、将来の被災地の人々に対して利他的な行動を展開する「被災地のリレー」(Pay-It-Forward Network: Atsumi 2014; 渥美 2014)を紹介し、被災地のリレーによる未来の他者との共生について検討する。

1. 事例―被災地のリレー

ボランティア元年と言われた阪神・淡路大震災（1995年）から20年が経過しようとしている。どこかで災害が発生すると、災害ボランティアが駆けつけ、救援活動を展開する姿が見られるようになった。また、災害ボランティアは、緊急時の一時的な活動に留まらず、長期的な復興過程にも参加するようになった。さらに、次なる災害に備えて、各地で平常時にも活動するようになってきた。そして、各地に散らばる災害NPOや全国の社会福祉協議会、および、その関連組織などは、こうした災害ボランティアの動きを支える役割を担っている。

阪神・淡路大震災の頃、災害ボランティアを取り巻いていた風景と、東日本大震災（2011年）を経たことで見えてきた風景には、決定的に異なる点がある。災害ボランティア元年と称された阪神・淡路大震災の前には、災害ボランティア活動を体験したり、目の当たりに見たりした人々の数は圧倒的に少なかった。しかし、東日本大震災に至るまでには、多くの人々が災害ボランティア活動に参加した経験をもち、それを語り、また、災害ボランティア活動を目の当たりにしたことのある被災地が、日本に点在した。例えば、阪神・淡路大震災の被災地、中越地震（2004年）の被災地、中越沖地震（2007年）の被災地などは、すべて、東日本大震災の頃には、すでに、災害ボランティアの活動を経験していた。その結果、過去の被災地は、現在の被災地を支援するという動きが生じている。筆者は、このことを「被災地のリレー」(Pay-it-Forward Network)と称してきた。

写真1.　中越地震の被災地（新潟県小千谷市）から東日本大震災の被災地へ

ここでは、渥美(2014)に収録されている事例から、中越沖地震の被災地で災害ボランティアの利他的行動を体験した被災者たちが、東日本大震災の被災地の住民に対して展開した被災地のリレーを紹介しよう。

朝の気温がマイナス7度を記録した2011年12月10日、岩手県野田村役場の前の駐車場に刈羽村から来たバスが到着した。刈羽村社会福祉協議会の面々と村民合わせて15名が、夜行バスの疲れも見せず降り立った。筆者が理事長

を務める特定非営利活動法人日本災害救援ボランティアネットワーク（以下、NVNAD）も、この日、西宮からのバスを運行した。筆者らは先に野田村に入り、2台のバスを迎えた。双方のバスに、互いに顔見知りのスタッフがいるため、バス間の事前の調整は万全で、すぐに活動が始まった。まず、刈羽村の方々が中心となり、泉沢地区にある仮設住宅で餅つきを行ったのを皮切りに、集会所での交流会、趣味の手芸について技術や作品の交換などが始まった。あれこれと細かく計画されたプログラムなどはおよそ不要であり、刈羽村の住民と野田村の住民は、まるで以前からの知り合いであるかのように会話を交わし、溶け合うような交流を展開する姿が見られた。会場には、西宮、刈羽、野田のリレーであることを示す横断幕も飾られた。

写真2.　中越沖地震の被災地（新潟県刈羽村）から東日本大震災の被災地へ

また、新潟県柏崎市の企業から協力を得て持参したお菓子は、5カ所に分散されている仮設住宅の全戸に対し、一軒ずつ手渡しで配布された。どこに行っても、すぐに会話が始まり、時に、野田村の方も刈羽の方も、被災当時を思い出して涙される場面があった。夕方からは、現地で活動するチーム北リアスと泉沢仮設住宅の方々とが一緒に開催してきた月例交流会と野田中学校仮設住宅で同時開催された交流会に別れて参加し、今度は「新潟の酒と岩手の酒の飲み比べだぁ」などと賑やかに交流が始まった。途中、参加者から歌は出る、思い出話に花が咲く。大いに盛り上がる中、あちらこちらで、被災体験を含む深刻な話が繰り広げられていたことも印象的であった。

この日の活動を通して、刈羽村からのボランティアが、野田村で被災された方々への想いを届けようと、野田村各地で懸命に活動している姿は、多くの人々の胸を打つものであり、翌朝の地元紙にも採り上げられた。筆者自身、2007年の中越沖地震の救援活動からずっと交流を続けてきた刈羽の方々の姿に、あの当時大変だった刈羽村が重なり、「いつか、同じ苦しみにある方々の傍に寄り添いたい」と仰っていたことが実現したことに感銘を受けていた。

筆者のフィールドノートには、参加者の言葉として、

> 「ずっと助けられるばっかで、何とかお返ししてぇのぅと思ってたいやぁ。これでやっとね。おらほんと嬉しいんだよ」

> 「おら、ボランティアなんてわかんなかったし、はっきりいってきれいだったのぉ。でも、いっっっしょうけんめ、おらの家の落ちたブロック片付けてくれる姿。あれにゃぁこころ打たれたのう。でも、誰だかわかんね。きっとさ、おらも元気になったら何かお返ししようとそんとき思ったんさ」

> 「こうしてここにお返しさせて頂くことが、私たち支援を受けた者の務めだと思います」

といった声が記されている。

さらに刈羽村からのボランティアが去った後、野田村で話を聞くと、「支えてもらうばかりでは心苦しい」という声が聞こえることがある。また、「何とかお返しをしたい」という相談を受けることもある。そんな時は、ボランティアによる活動が、被災者本位ではなくボランティア本位になっていないかどうかを真摯に再検討しながら、「もしまたどこかで災害に遭われて困っている方々がいらっしゃれば、助けて差し上げて下さい」と応じている。

2. 被災地のリレーに関する論点

ここでは、被災地のリレーに関する論点として、渥美(2014)で提示した議論を再説しておく。

まず、リレーが一方向に向かって展開していることを指摘しておきたい。具体的には、1995年に全国からの支援を受けた兵庫県西宮市から、2007年中越沖地震で被害を受けた刈羽村へと支援がなされ、そして、2011年東日本大震災に際して、刈羽村から岩手県野田村へと支援が展開された。ここで、刈羽村から西宮市への救援活動は行われていないし、過去にそうした事例があったわけではない。言い換えれば、西宮から刈羽村への救援活動は、過去に刈羽村から西宮市へ救援活動が行われたからその返礼に実施されたものではない。また、野田村から刈羽村や西宮市への救援活動は行われていないし、過去にそうした事例があったからその返礼として、今回の救援活動が展開されたわけではない。この事例が示す救援活動のリレーは、一方向的である。

次に、リレーの内容について検討する。被災地のリレーは、被災体験をもつ人々が実施するため、被災者として、同じ苦しみを知っているから、同じ悲しみを体験しているから、わかり合えるのではないかと考えるのが自然かも知れない。しかし、被災者であれば、苦しみや悲しみを共有しているのだろうか。言うまでもなく、被災地のリレーに参加している人々と、その訪問先の被災者の苦しみや悲しみは同一ではない。そもそも、特定の被災者が、特定の災害に遭遇した経緯や、その結果抱いている苦しみや悲しみについて、他者が知るよしもない。むしろ、ここで注目したいのは、災害に遭遇すると、そう簡単には理解してもらえない、苦しみや悲しみをもつということ、そのことを共通に知っているということである。

他者の痛みへの真の共感は、「それは私にはわからない」、「私からはそこにどうしても到達できない」ということを、痛切に実感することのほうにあるという指摘がある（熊谷・大澤 2011）。共感不可能性を共感することが、痛みや悲しみを和らげることは、大変示唆的である[1]。

被災地のリレーの現場で起こっていることも同様であろう。刈羽村からのボランティアが、野田村の仮設住宅の住民とともに涙を流すとき、そこに数年前の自分を重ねていることは想像に難くない。と同時に、刈羽村からのボランティアは、津波で多くを失った野田村の被災者を理解できると考えて、被災者の苦しみに随伴したサポートを展開したわけではない。むしろ、餅をついて味わい、手芸を楽しみ、お菓子を配り、そして、日本酒の味比べをやりながら、時を共に過ごしたに過ぎない。こうした一見、苦しみや悲しみとは関係のないところでのサポートが、被災者の癒やしに繋がることを願って活動したわけである。被災地のリレーが示唆していることは、いわば、「共感不可能性に関する共感」が、人と人とをより強力に、より深く結びつけるということである。

最後に、被災地のリレーの局所性と泡沫性について検討し、実践的な対応策について提案しておく。被災地のリレーの事例が示唆するのは、災害ボランティアが、一方的・片務的な支援行為の連鎖として、複数の被災地を接続するということであった。簡単に想像できるように、もし全体集団のサイズが小さい場合には、片務的に接続された地域は、いずれ連鎖が充満し、最初の地域へとベクトルが戻って来ることはあり得る。言い換えれば、時を経て、互助的な関係が成立することになる。しかし、被災地のリレーの全国的な展開を考えるのであれば、現時点では、実にほんのわずかの自治体の人々が局所的に関係を構築したということに過ぎず、日本社会全体といった大きな場には、ほとんど何ら意味を持たないように見える。

しかし、支援の連鎖が、この社会の一部でローカルに生じると、実は、多くの人々が繋がる契機となることは、社会心理学者スタンレー・ミルグラムによるスモール・ワールド問題(Milgram 1967)の議論によって示されている。その後の、ワッツとストロガッツによる数理的解析の結果(Watts & Strogatz 1998)は、ランダムとも言える結びつきがいくつかあれば、全体が結びつく可能性が高いことが実証されている。自然災害は、各地で発生する。いわば、発生する土地は、ランダムに近い。となれば、被災地のリレーが行われることによって、そうした結びつきは全体に拡散し、リレーの局所性を凌駕すると考えてよかろう。

一方、被災地での救援活動が泡沫的であることは、13世紀の『方丈記』をはじめ、古くから指摘されている。被災地のリレーも同様であろう。だとすれ

ば、リレーの泡沫性を打破し、いかに持続的に展開するかということが課題となる。ここでは、持続を間歇的な持続と捉えよう。すなわち、被災地のリレーによって生まれた結びつきが、そのまま持続することを目指すのではなく、別の時点、別の場所でも被災地のリレーが発生することを誘発する手立てを考える。ここでは、災害NPOに注目したい。災害NPOは、被災者と緊密な連絡をとって、災害ボランティアに対し、様々な活動プログラムを準備することを重要な活動としている。被災地のリレーという支援活動の連鎖が、その局所性を打破し、社会に拡散する可能性まで見据えたとき、災害ボランティアをコーディネートする災害NPOが果たす役割はますます重要になる。過去の被災地との交流を継続している災害NPOであれば、過去の被災地の人々が、その意向を示した時、災害ボランティアとしてコーディネートしていくことができる。災害NPOは、まず、徹底的にローカルに実践することが求められる。被災地での救援活動は、その一つ一つが希薄であればリレーになっていかないからである。したがって、特定の被災地や被災者を支援する場合、徹底的にそこに寄り添う活動を展開することが肝要である。そして、現場において、何らかの返礼の動きがみられた場合には、次なる被災地での活動があり得ることを伝える。そして、災害が発生すれば、その都度、被災者本位に積極的な活動を展開する。災害NPOが、こうした視点をもって活動することによって、災害ボランティアの活動が、間歇的ではあれ、被災地のリレーを励起する。

3. 未来の他者への返礼

被災地のリレーは、利他的な行動のひとつである。ただし、利他的に行動した者が、その相手から返礼を受け取るわけではない。利他的行動の恩恵に浴した側は、当該の利他的行動を行った者ではなく、未来の第三者に利他的行動を行う。こうしたことは、災害ボランティアの領域以外にも見られる。ここでは、進化生物学の議論を参照しておこう。

進化生物学の分野では、利他的な行動が、進化的にどのような意味を持つのかといった観点から、様々な研究が行われてきている。例えば、二者間の互酬的な行動ではなく、三者（以上）による利他行動の発生や継続について、理論的研究やシミュレーション研究(e.g., Nowak & Roch 2007; Nowak & Sigmund 2005)、また、現場での観察研究（e.g., Kato-Shimizu, Onishi, Kanazawa & Hinobayashi 2013)など多様に研究されているが、必ずしも統一的な説明がなされているわけではない。ここでは、三者による利他行動を分類して、被災地のリレーを位置づけておこう（表１）。

表1. 三者（以上）による利他行動の類型

関係	利他行動の流れ	対応する現象	注目する他者
逆行的互恵性	A→B→C	被災地のリレー	未来の他者
順行的互恵性	A→B、C→A	情けは人のためならず	過去の他者
模倣	A→B、C→B		現在の他者

まず、被災地のリレーを、ある時点でAさんがBさんを援助した場合、次の時点で、BさんがCさんを援助することという風に考えることができる。この関係を進化生物学では、逆行的互恵性と呼ぶ。ちなみに順行的互恵性とは、AさんがBさんを援助した場合に、次の時点で、CさんがAさんを援助することを指す。この関係は、いわゆる「情けは人のためならず」と対応している。無論、三者関係には、もう一つ、AさんがBさんを援助した場合、次の時点で、CさんもBさんを援助するという関係もあり得る。この場合には、Cさんは、Aさんを真似たとも言えようから、模倣と呼んでおこう。

ここで、それぞれの利他行動が、どのような他者に向けて行われているかを整理すれば、逆行的互恵性では、Bにとって、利他行動を受けている時点から将来において、Cに利他行動を実施するのであるから、「未来の他者」に注意が払われる。そこで、被災地のリレーを「未来の他者への返礼」と呼ぶわけである。一方、直接的互恵性の場合には、利他行動を過去に行ったAに対して利他行動を行うのであるから、「過去の他者」に注目している。また、模倣は、AがBに対して利他行動を行っているまさにその時にCもBに対して利他行動を行うのであるから、「現在の他者」に注目している。

進化生物学によれば、「情けは人のためならず」という関係は、Aにとって、メリットがあるから、適合的であるとされる。無論、被災地のリレーも、もしA、

Ｂ、Ｃの三者しかいなければ、ある程度高い確率で、その後、ＣがＡを援助することもありうるから、Ａにとって、メリットが生まれるが、人数が多くなれば、Ａはメリットを得られる確率が低下するため、被災地のリレーという関係は、生じにくいし、進化論的には説明困難であるとしている。

こうした研究は、数理モデルに基づくシミュレーションであったり、子どもたちの利他行動を探求する発達心理学的な研究であったりする。ここでは、一つ一つの研究成果を列挙しないが、概して、シミュレーションを用いた数理モデルや、発達心理学者の観察では、Ｂに焦点が当てられてこなかった。すなわち、情けは人のためならずのモデルであっても、模倣のモデルであっても、Ａから援助を受けたＢの行動ではなく、Ｃの行動に注目が集まっている。その結果、現時点では、被災地のリレーについて、厳密な知見は得られておらず、被災地のリレーを起こしやすくする要因などについては、今後の研究を待たざるを得ない。

4. 被災地のリレーによる未来の他者との共生

リレーの場面を災害ボランティアの側から見ると、ただただ被災者の傍にいて、臨機応変に活動し、被災された方々に寄り添うということに尽きる。一方、被災者の側から見ると、災害ボランティアに助けられたことは、与えられるばかりだと感じられ、何か「負債」をおわされたように感じられることもある。実際、野田村では、ボランティアが帰った後に、「支えてもらうばかりでは心苦しい」という声があった。また、「負債」を返そうと考え、「何とかお返しをしたい」という相談を受けたりもしたのであった。実際、刈羽村の人々が、野田村で活き活きと活動していた姿には、あたかも「負債」をようやく返したという安堵感があったように思える。こうした「負債」の返済が、被災地のリレーの原動力の一つになっている。ただし、その返済先[2]が、贈与の送り手ではなく、未来の他者、すなわち、新たな被災地の人々であるということが、被災地のリレーたる所以である。

ここで、「負債」の返済を中心に据えつつ、未来の他者への負債の返済を介した共生によって構想される社会を検討する。返済とは、文字通り、何かを貸してくれた相手に、それを返すことである。確かに、被災地のリレーの参加者は、「被災地にお返しする」と発言しているが、正確ではない。つまり、本来は、お返しは、利他行動を行った当の相手にお返ししなければ、お返しにならないからである。しかし、被災地のリレーでは、新たな被災地の住民という見ず知らずの第三者、未来の他者、に返礼している。被災地のリレーという負債の返済を介した未来の他者との共生が積極的に志向される社会とはどのような社会であろうか。

ここでは、ナタリー・サルトゥ＝ラジュによる『〈借り〉の哲学』(2014)を参照しながら、未来の他者との共生を志向する社会を展望する。著者は、〈返さなくてもよい借り〉をシステムの中心に据える社会を構想している。それは、「先行する世代から贈られたものを〈借り〉とし、それに自分がつくったものを加えて、あとから来る世代に贈るかたちで、その〈借り〉を返す―これによって、個人の歴史は、より大きい歴史、永遠に続いていく人類の歴史につながっていくのだ」(p.211)という表現にあるように、ある世代(時点)で得たものに対し、負債感を感じて、それを贈ってくれた人に返済するのではなく、次の世代(時点)に“返して”いくことである。まさに「被災地のリレー」と同じである。著者に従うならば、被災地のリレーによって、負債が未来の他者に返済されることは、個人の被災経験が、より大きな永遠に続く人類の歴史と接続するということである。ここで、人類の歴史まで広く拡張せず、被災した集落の歴史との接続などを念頭に置けば、被災地のリレーによって未来の他者との共生を図ることは、被災した集落の永続的な復興へとつながることが予想される。

ここで、〈借り〉とは、経済的な負債と恩や負い目といった意味をまとめた概念である。そして、経済的な債務の話だけを採り上げるのではなく、また、神に対する債務といった宗教的な話だけを採り上げるのではなく、〈借り〉を広く、〈贈与〉や〈交換〉の概念と同様に哲学的、社会学的に採り上げる。

〈贈与〉については、「返礼を求めないものとする哲学的な捉え方」(ハイデガー、レヴィナス、デリダ、マリオンなど)と、「返礼を求めるものとする社会学的な捉え方」(モース)の〈贈与交換〉が対立してきたという。しかし、〈借り〉を導入すれば、問題は解消する。つまり、「〈贈与〉したほうが返礼を求めようが、求めまいが〈贈与〉されたほうには〈借り〉が生じる」(p.12)と考えるわけで

ある。そうすれば、〈借り〉をどうするかということが問題になる。通常、〈借り〉は、ネガティブに捉えられる。実際、資本主義の社会では、借金を返せなければ、社会的に抹殺されるから、〈借り〉を持たないようにする動きが生じる。しかし、これは〈借り〉のポジティブな面を見落としている。つまり、「相手に感謝の気持ちを感じ、そのお返しに自分ができることをして支えあっていく」契機であるというポジティブな面である。

では、〈借り〉はどうすればよいだろうか？著者によれば、「与えた方に「返礼」するのではなく、ほかの者に、あらたな〈贈与〉を行えばよい」(p.21)わけである。「〈贈与〉が〈借り〉となり、その返却があらたな〈贈与〉となることで、〈返礼を求めない贈与〉(無償の愛)は時代を超えて受け継がれていく」(p.22)ことを構想する。さらに著者の言葉をそのまま引用するならば、

> 「それによって、私たちは、弱者をきりすてるのでなく、いちばん助けの必要な人に力を貸すことができる。そうやって、かつて助けられた人がその〈借り〉を社会に返し、またそこで助けられた人がその〈借り〉を社会に返していく―その連環が続いていくようにするのである」(p.26)。

こうした構想は、被災地のリレーが定着し、未来の他者との共生が施行される社会を示しているとは考えられないだろうか。

おわりに

本稿では、利他的な行動を受けた際に、当の相手に対する返礼が事実上不可能である場合に、人々が行う未来の他者への返礼について、被災地のリレーをキーワードとしながら事例をもとに考察してきた。また、サルトゥ＝ラジュは、〈借り〉を「先行する世代から贈られたものを〈借り〉とし、それに自分がつくったものを加えて、あとから来る世代に贈るかたちで、その〈借り〉を返す―これによって、個人の歴史は、より大きい歴史、永遠に続いていく人類の歴史につながっていくのだ」(p.211)と述べていた。ここで注目したいのは、負債を返済した側の変化である。著者によれは、個人の歴史が、より大きく永遠に続いていく人類の歴史に接続するという。このことは、何を意味するだろうか。

注目すべきは、リレーを開始した側、すなわち、過去の被災地の変化である。このことについて、実に的確に表現された場面がある。東日本大震災で甚大な被害を受けた宮城県南三陸町で支援活動を展開している地元の方にインタビューをしていた時のことである。まだ被災の傷跡があちらこちらに残っている時期、南三陸の復興について話してくださった。

> 「どこか他の被災地をお助けできた時、その時が、私たちの復興です」

極論ではあるが、この言葉に基づくならば、リレーを完遂してはじめて過去の被災地の復興は一段落するとも言えよう。上記の事例の中でも、「ずっと助けられるばっかで、何とかお返ししてぇのぅと思ってたいやぁ。これでやっとね。」と語られていたのであった。これでやっと、自らの復興への取り組みも一段落するという意味であろう。図式的にいえば、災害ボランティアから一方的な支援を受けた被災地は、リレーを完遂しない限り、ずっと復興途上にある被災地であり、リレーを行った時、はじめて復興が遂げられると感じられるのかもしれない。

被災地のリレーを介した未来の他者との共生について、2つのことが明らかになった。まず第1に、被災地のリレーは、未来の他者、すなわち、新しい災害における被災者への救援活動を促進する。これは、間歇的であれ、被災地のリレーが拡がっていけば、未来の他者との共生による社会へとつながっていくことを示唆している。第2に、リレーを実施している側の復興過程が促進される。ただし、現時点では、リレーを実施している側の復興そのものについては、被災地のリレーと関連付けて検討されてきたわけではない。被災地のリレーと、リレーの発信側の復興過程との関連に関する研究が待たれる。

注

1　例えば、慢性疼痛の治療場面では、痛んでいる相手に共感して痛みを取り除いてあげようとする「痛み随伴性サポート」と痛みとは関係のないところでサポートする「社会的サポート」がある。そして、前者は、痛みをかえって悪くすることがわかっており、痛みに共感できないことに〈共感〉し、痛みとは関係のないところでサポートをする後者の方が痛みを和らげる

ことができると報告されている。

2　もちろん、「負債」であれば、他の返済先もありうる。例えば、将来、利他行動を展開する人々を想定し、その人々への支援を開始するという手法がある。具体的には、刈羽村の人々が、災害NPOを支援するという手段である。しかし、こうした返済を行ったとしても、間に災害NPOが介在して、支援が間接的になるだけだと考えておきたい。すなわち、災害NPOを介してではあっても、やはり、刈羽村の人々は将来の被災地の住民へとリレーを展開していると位置づけておきたい。

参考文献

渥美公秀
2014 『災害ボランティア――新しい社会へのグループ・ダイナミックス』弘文堂。

熊谷晋一郎・大澤真幸
2011 「痛みの記憶/記憶の痛み――痛みでつながるとはどういうことか」『現代思想』39(11): 38-55。

サルトゥ＝ラジュ、ナタリー
2014 『〈借り〉の哲学』太田出版。

Atsumi, T.
2014 Relaying support in disaster-affected areas: the social implications of a'pay-it-forward' network. *Disasters* 38(S2): S144－S156.

Kato-Shimizu, M., Onishi, K., Kanazawa, T. & Hinobayashi, T.
2013 Preschool children's behavioral tendency toward social indirect reciprocity. *PLOS ONE* 8(8): e70915.
[DOI]10.1371/journal.pone.0070915
[URL]http://dx.plos.org/10.1371/journal.pone.0070915

Milgram, S.
1967 The small-world problem. *Psychology Today* 1: 60-67.

Nowak, M.A. & Roch, S.
2007 Upstream reciprocity and the evolution of gratitude. *Proceedings of the Royal Society B,* 274: 605–609.

Nowak, M.A. & Sigmund, K.
2005 Evolution of indirect reciprocity. *Nature* 437: 1291-1298.

Watts, D.J. & Strogatz, S.H.
1998 Collective dynamics of "Small-world" networks. *Nature* 393: 440-442.

論文

利他としての無為
共約不可能な他者とのかかわりに関する原理的考察

岡部 美香
大阪大学大学院人間科学研究科准教授

要旨

本論は、平成26年度ヒューマン・サイエンス・プロジェクト「利他主義の人間科学の創生に向けて」の成果の一環であり、今日の教育学において「利他」がいかに論じられているかを、ケアリング論の展開を中心に概説するものである。教育学にケアリング概念を導入したN. ノディングズの思想は、他者との対等な相互性というそれまでの倫理的原理を批判し、非対等かつ非対称的な関係においても相互性が成立すると説くものであった。だが他方、その思想は、直接的な応答が困難な共約不可能な他者へのケアを軽視する恐れ（「関係における悪」）を内在させるものでもあった。そこで、共約不可能な他者に対する倫理的な応答についてH. ヨナスに即しつつ考察するなかで、他者の存在を自由な開かれたままの状態に保つ「利他としての無為」が、共約不可能な他者に対する私たちに可能な応答の一つであることが明らかになった。最後に、利他としての無為という倫理的原理を具現化する技法の探求には災害の記憶が手がかりとなり得るであろうことを、今後の展望として述べた。

目次

はじめに
1. ケアリング論の特徴
2. ケアリングに内在する悪
3. 共約不可能な他者への応答
おわりに

キーワード

ケアリング
相互性
応答責任
関係における悪
共約不可能な他者
無為